

書信断片

出来るだけ早く歸る積りで療養してをりますが、思ふにまかせず泣きたい
様な事が度々御座います。百合子にも本當にすまなく思ひます。幼稚園の
時からあれには、一度もつくすことが出来ないので不幸な子だと思ふと涙
が出来ます。

今こちらでは思ふ様な養生をさせて貰つてをりますので、決して不平も
不満もありません。この頃は、毎日、阿彌陀經やら、その他の聖教など、
繙いて見たり、母上といろいろと話して居ります。只々、皆様に私故の御
苦勞を永い間おかけ致しますのが辛いのです、身一つなれば至つて安らか
な事で御座いますけれど、わけのわからぬ足手まとひの子供を二人まで御
世話を願ふのが一番心苦しう御座います。

『本願寺物語』を大方よみました、なかなかよく書いてあると思ひます、

仰せの通り病氣で寝てゐればこそいろいろの佛書にも親しめますもの、元
氣で働いてゐてはとてもゆつくり味讀するやうな事は出来ますまい。それ
を思ふと、かう云ふ機縁に會はしていたゞくのも佛恩と深く喜ぶべきこと
であります。でもかうして永く病床にあれば、始終愚痴のみ申して居りま
す、母上が御寺に参りますといろいろの御法のお話をしてくれます、今日
も西教寺さんへ参りましたから歸りましたら御話のきかれること、待つて
ゐます。

昨年十一月に此地へ來てからよく手紙を書くので、この便箋百枚綴が三
冊もう大方なくなりました。自分乍ら驚きます、それが大方岩國ばかりで
すから驚きますよ、お宅から來た手紙も三斤入りの砂糖箱へ殆んど一杯に
なりました。

お父上様も日々御衰弱が加はり、皆様も本當に御心痛と思ひます。お母
様が御達者で御看病なさる故、御不自由はないと思ひますもの、私が御
目にもかゝられず、御言葉もかけられぬ身を悲しみます。御姉上様が御出

になれば御母様もお心強く、御父上様もせいよく思はる、事と思ひます。いたらぬ私の不孝を御詫なさって下さいませ。あなた様も兄弟もなく親族も遠いのに、その上、私がこんな身の上にて御父上様の御病床は本當にお淋しい事と思ひます。御手紙の通り、あなた様も私も弱い体、御父上様の後々の事、御心配なさるのも無理からぬ事です。もう少し元氣になつてお目にかゝつたらとそれのみ思つてをります。

○最後の書信

先日は御多忙中をよくこそお出で下さいました、時間が余りなかつたのでお話も出来ず残念で御座いました。

でも、あなた様の御無事なお顔を拝し、和光の元氣な姿を見、御母様や百合子の事など直きにきくことが出来て嬉しく安心しました。（畧）お歸りの翌朝下さいました御葉書拝受しました。和光の得意相に云ふ顔、それ

をきく百合子の顔が目に見えるやうです、私も一日も早く歸りたいと一生懸命に養生して居りますが、次々に故障が出来て永引き皆様に御心配をかけます。（畧）〔六、一二、七 死の五日前〕



オカアサン、ビヨウキハ、マダナホリマセンカ。

ハヤクナホッテ、オカヘリナサイ、カヅミツサントマッテキマス。ナツヤスミニユクノガウレシイデス。

六月二日

ユリ子

オカアサマ

(完)